

て、ファイバーより造った人造毛に内地豚毛を混ぜて使用。昭和15年下半年になると、支那産豚毛のストックが底をつき、馬毛、牛毛、羊毛を使用するようになった。

木・竹柄歯刷子の浮上：竹柄歯刷子は、すでに明治・大正の頃から、内地向けの安物として生産されていたが、主役である牛骨・セルロイドの使用不可能となったため、新資材として目立つ存在となったのである。すなわち、竹はわが国の特産であり、木竹は戦時中も統制品から除外されていた関係上、大々的に活用されるようになった。

これを製作する方の側からみると、木や竹柄の歯刷子を造るのと、セルロイド柄歯刷子を作るのとは、その工程が全然異なっており、職人も全く別系統に属している。セルロイドは全工程が機械を用いてできるが、竹や木を材料とする場合は、機械に頼ることができないから、製造能力がぐっと落込んでいった。また、「国民徴用令」が強化され、平和産業である歯刷子製造業者から多くの従業員が徴用されて、軍需工場方面に動員されたため、人手不足がこれに拍車をかけた。他方、昭和16年10月「商工省告示第970号」により、検査に合格した歯刷子製品は、公定価格通りに売れたが、検査に外れたものは、公定の半額で売らねばならないことになった。また、木・竹歯刷子等の安物では、内職の手間賃が幾らにもならない関係から、他の割のよい仕事に移る者が多く、この面からも、生産高が次第に減少していった。

以上のように、歯刷子製造業界は、戦争の大波に揺り動かされ続けてきた。そのうち、木の葉舟的な存在であった竹柄歯刷子に焦点を当てて報告する。

6) 形成外科と顎顔面補綴のはじまり

The origin of plastic surgery and maxillofacial prosthetics

日本歯科大学 新藤 恵久

インド古代医学は、形成外科の分野で世界の水準より数百年進んでいた。釈迦の誕生した B.C. 6 世紀に SUSRUTA は、造鼻術について今日と変

わらぬ手術法を記している。この古代医学と仏教の教理とが結びついて生れた仏教医学は、シルクロードを東へ中国に、ついで朝鮮を経て日本に伝えられた。

日本に定着した仏教文化は、平安時代初期になるとわが国独自の木彫仏技法を生みだした。この技法より生れた木床義歯は、その審美性や実用性、そして床の維持法など今日の義歯と比べて遜色のないものであった。また今日の義眼の祖ともいべき仏像の玉眼があらわれるのは、平安後期である。

わが国に義眼についての専門的な記載は、天保2年(1831)発刊の「眼科錦囊」を最初とするが、それ以前から入歯師によって精巧な義眼が作られていた。江戸時代の義眼としては、伊勢松阪の口中医、柘植光石作(伝)のものが現存するが、これは木床義歯の蠟石の前歯の彫刻技術を応用したものである。

わが国に梅毒が伝来したのは、室町時代末期である。そして江戸文化の花を咲かせた遊女のかげには、恐ろしい性病があった。この時代には、2人に1人が梅毒であったといわれ、その結果、鼻がくずれてしまった人が多くあった。この人々に附鼻と呼ばれる木製の鼻を作ったのも入歯師であった。附鼻は、川柳にもしばしば登場するが、宝暦の頃の版本「外の海」にも、入目、入鼻の記載がみられる。

シルクロードを西へ運ばれたインド古代医学の文献は、11世紀にはペルシャ、アラビア語に翻訳されてヨーロッパへ伝えられた。15世紀イタリアに渡ったインドの造鼻術は、16世紀、フランスの PARE' によって完成される。PARE' は義眼も発明している。わが国で造鼻術が初めて行われたのは、明治2年2月英医 WILIS によるものである。

7) 口蓋栓塞子の歴史について

Studies on the History of Palatal obturators

日本歯科大学新潟歯学部 本間 邦則

コロンブスのアメリカ大陸発見によりヨーロッ